

表-6 層間変形試験結果

試験体記号	目標の層間変形(δ_0) mm及び層間変形角(R_0) rad	加力回数	層間変形(δ) mm及び層間変形角(R) rad *1	各部の変位 mm							目視観察による試験体の状況 *2
				DG1	DG2	DG3	DG4	DG5	DG6	DG7	
EG	$\delta_0 = \pm 2.7$ $R_0 = \pm 1/800$	1回目	$\delta = 2.7$ $R = 1/800$	3.3	0	0.1	-0.1	-0.3	-0.1	0.6	鉛直スリットと柱部材のずれ(反試験機側)
			-2.7 $-1/800$	-4.0	0	-0.4	0.1	0.3	0.6	-0.3	鉛直スリットと柱部材のずれ(試験機側)
		5回目	2.7 $1/800$	3.0	0	0.1	0	-0.3	-0.2	0.5	1回目と状況同じ
			-2.8 $-1/757$	-3.6	0	-0.2	0.1	0.2	0.5	-0.2	1回目と状況同じ
	$\delta_0 = \pm 10.6$ $R_0 = \pm 1/200$	1回目	10.6 $1/200$	11.5	0	0.1	-0.2	-0.8	-0.9	1.8	鉛直スリットと柱部材のずれ進展(反試験機側)及び壁相当材脚部による水平スリット端部へのめり込み(試験機側)
			-10.6 $-1/200$	-12.3	0	-0.5	0.1	0.8	2.0	-0.8	鉛直スリットと柱部材のずれ進展(試験機側)及び壁相当材脚部による水平スリット端部へのめり込み(反試験機側)
		5回目	10.8 $1/196$	11.4	0	0.1	-0.1	-0.7	-1.0	1.7	1回目と状況同じ
			-10.6 $-1/200$	-12.3	0	-0.5	0.1	0.7	2.0	-0.8	1回目と状況同じ
$\delta_0 = \pm 21.2$ $R_0 = \pm 1/100$	1回目	21.3 $1/100$	23.2	0	0.2	-0.6	-1.4	-1.8	3.6	鉛直スリットと柱部材のずれ(反試験機側)及び壁相当材脚部による水平スリット端部へのめり込み(試験機側)各進展, 水平スリット上部と壁相当材脚部コンクリート部分の開き及び鉛直スリットの浮き上がり(反試験機側)	
		-21.2 $-1/100$	-23.7	0	-0.7	0.2	1.6	3.6	-2.0	鉛直スリットと柱部材のずれ(試験機側)及び壁相当材脚部による水平スリット端部へのめり込み(反試験機側)各進展, 水平スリット上部と壁相当材脚部コンクリート部分の開き及び鉛直スリットの浮き上がり(試験機側)	

試験日 平成15年 2月25日

(注)*1 実際の試験で得られた層間変形 δ 及び層間変形角 R を示す。

*2 水平スリットの室内側に使用されているポリエチレンフィルム被覆ロックウール保温板は、床部材に両面テープで接着されていたため、水平スリットの浮き上がりについては確認する事が出来なかった。